

第 16 章 本通り神 仏^{かみ・ほとけ}の因陀羅網

輻輳し複雑怪奇な人間社会です、例え「高清水通り」に係ることと雖も、限りある言葉・文字で真実の 100%を記述することは不可能であります、本通りから学んだこと、教わったこと・気付かされたことを含めて、信仰・精神性の側面からこれまでの全てを纏めて見ることにします。

1. まえおき

(2) 本通り、道の位置付けは図(表)－**2**のとおり。

遙か昔から、高清水通り全体において、この山道の^{まえ}前基点(旧)本道寺と^{あと}後基点「元高清水」の間は偶然にも九十六丁の距離を成していたのです。

このように設定された舞台は、^{あめつち}天地初めて^{ひら}拓けし時に、日月星が住まう天がこの地を選定し、神^{かみ}仏^{ほとけ}を分身させて写し込んだ自然造形なのです。

もちろん、

- ・単なる山菜・きのこ・薪・木材等採取に係る往来道ではなかったのです。
- ・月山向けピークハント、ただ景色を眺めるだけの山道ではなかったのです。
- ・身を隠す乱暴狼藉者や盗人の裏街道ではなかったのです。

したがって、後世になって、旧本道寺境内一角への道路原標打点とか、文政五年起点記念碑建立とか、九十六丁の里程に合わせた丁石安置とか、「姥像等石碑群」地の観音浄土感得とか、水場「石船」への舟形石造水溜奉納とか、^{さいとば}柴明場の烏川不動滝遥拝場・御祈禱場整地とか、「高清水（元高清水）」地への小屋掛けとかは、それらの目的に適う最も相応しい位置として必然性があったということです。

図(表)－ 2

(3) 松平斎光著「祭－本質と諸相」(朝日新聞社)の一節は図(表)－**3**のとおり。

五大・自然界に浮遊する神仏^{かみ}の有り様を端的に表現していると思います。

宇宙には諸種の個性を持つ霊質が充満し、互いに相離反集合し、千変万化の様相を呈するものである。そして、これを人間の所属する共同体の利害に関係させて判断すれば、宇宙は「あらま欲しき」善魂の要素と、「あらま欲しからざる」悪魂の要素との千差万別の組み合わせであることとなる。すなわち、宇宙は善悪、和荒両種の霊質の雑多極まりない変遷流動の拮据(るつぽ)であることとなる。

図(表)－ 3

以下、テクニカルな点を言うと「トポロジー的デフォルメ視点」を以って相関を多層化し記述します。なお、一つひとつの図(表)の相関説明は煩瑣となることから詳述は避けます。分り難い処、あるいは、奇異に感じられる処はご自由に想像してください。

2. (旧) 本道寺の包括的源泉～図(表)－4～図－7を参照のこと

旧本道寺縁起を踏まえて、原点に立ち返り、御大師（弘法大師こと空海）の心を探って見ます。第 19 章に別記したので要点のみを再掲します。

空海は、旧「月光山本道寺」を開山開基するに当って、月光山光明院と命名したのです。月は太陰のお月様であり、光は正真の明かりを放つ太陽のお日様であることは言うまでもありません。山号「月光山」の月の光を以って月（太陰）を強調し、院号「光明院」の（正真の）光を以って日（太陽）を強調しています。日（太陽）と月（太陰）を対等に扱っているのです。頭に『月光山』です、本尊の大日如来（日）を引っ込めて、冒頭に月（太陰）を立てています、いわば、日陰^{ひかげ}のものを日向に引き立てています。「一つは二つ、二つで一つ」とする、つまり、「照らすものと照らされるものに優劣はない」とする相対(待)相即不離、陰陽二元調和を明らかに強く意識し命名したことの表れと推察出来ます。対比的に整理すると以下図表のとおりです。

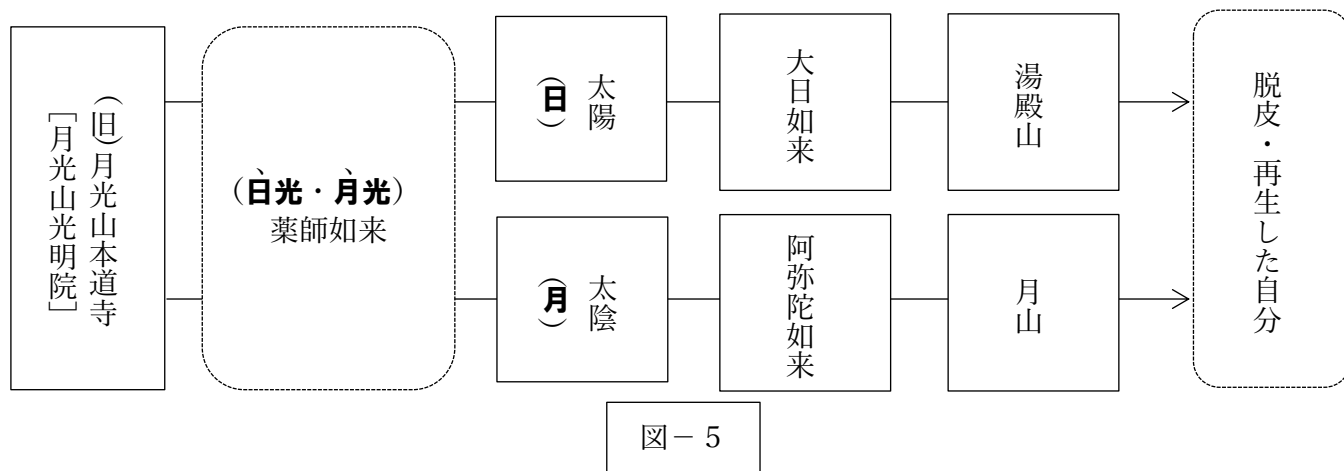
キーワードは「日・月」、すなわち“照らすもの”と“照らされるもの”の共存共栄、共生^{くげ}供華を願ったものと推察しております。

現世の人間に対し、主体対客体の固定的な対立を前提にする二者択一を越えた陰陽（異種）具有の両義性（両義体視観）を当たり前とする心の涵養を訓えようとする姿勢が読み取れます。

旧本道寺の由緒譚には、本尊としての大日如来は出て来るが、阿弥陀如来や薬師如来や弥勒菩薩を含めた本表のような対比的意味付けはもちろん書かれていないものの、繰り返すが、全貌を読み取る中で価値の掘り起し・再評価を図って整理したものです。

なお、阿弥陀如来と大日如来は如来の共同代表とすることを第 20 章に別記しています。

現在	本尊	対応如来	対応日月	山号・寺号 その後		山号・院号 開基時	
口之宮湯殿山神社	大日如来 (弥勒菩薩)	阿弥陀如来	月(太陰)	湯殿山大権現を勧請して改号、明治まで	月、光山	月、光山	表の顔
		大日如来	日(太陽)		本道寺	光明院	真の顔
月は、	太陰の月のことで、すなわち月山・月読命に照応します。						
光は、	太陽の日のことで、すなわち湯殿山・大日如来に照応します。						
図(表)－4							



(旧) 本道寺の包括的源泉				
(旧) 本道寺の実相	本寺と右三尊を直接結ぶ理由		本寺根本精神は三尊構造	
	本寺の開基以来の本尊である。 大日如来は自然崇拜・神祇信仰の象徴、太陽の神格化		■大日如 (未来架橋仏)	主尊
	・大日如来と共に如来(仏教)最高峰の共同代表である。 ・『九十六』(丁)の意義付け初源は右如来の四十八誓願にある。(96=48×2=96)		▲阿弥陀如来 (過去架橋仏)	(強力サポーター) 侍従尊
	本寺由緒譚の根本原理「日光・月光」の陰陽調和の意義を踏まえた右如来は、生命維持(心身のバランスある健康活動)発動力(験力)を有する。		●薬師如来 (現世架橋仏)	
	仏陀入滅後、56億7千万年後、弥勒菩薩が下生する時、一緒に即身成仏で眠っている弘法大師もこの世に帰る。		弥勒菩薩	副尊

図(表) - 6

曼荼羅浄土		阿弥陀浄土	
金剛界(智慧・合理)	胎蔵界(慈悲・情理)	大勢至菩薩(智慧・合理)	觀世音菩薩(慈悲・情理)
本尊； ■大日如来 （日・太陽）		▲阿弥陀如来 （月・太陰）	
光明院（火）		月光山（水）	
表の顔		裏（奥）の顔	
（※1 白月灯明如来）			
⇕		⇕	

日光菩薩（発光装置性・動相性）	月光菩薩（受光装置性・静相性）
命は心身に宿り、心身はその※2発受・心技体の調和にあり、よって、心身調あつての命 (日月) (三尊)	
●薬師如来 (発受一体・動静一体、現世利益の象徴・薬師浄土)	
(旧)※3本道寺	
図(表)－7	

※1；仏陀が生まれる前の遠い昔の昔に正法を説かれた仏をいう。

※2；ここでの発受（授受）は、あえて陰陽相対(待)二元の様相を指し、心技体は二元が解けた太一（一）を指しています。

※3；全部合わせての「本道寺」であります。

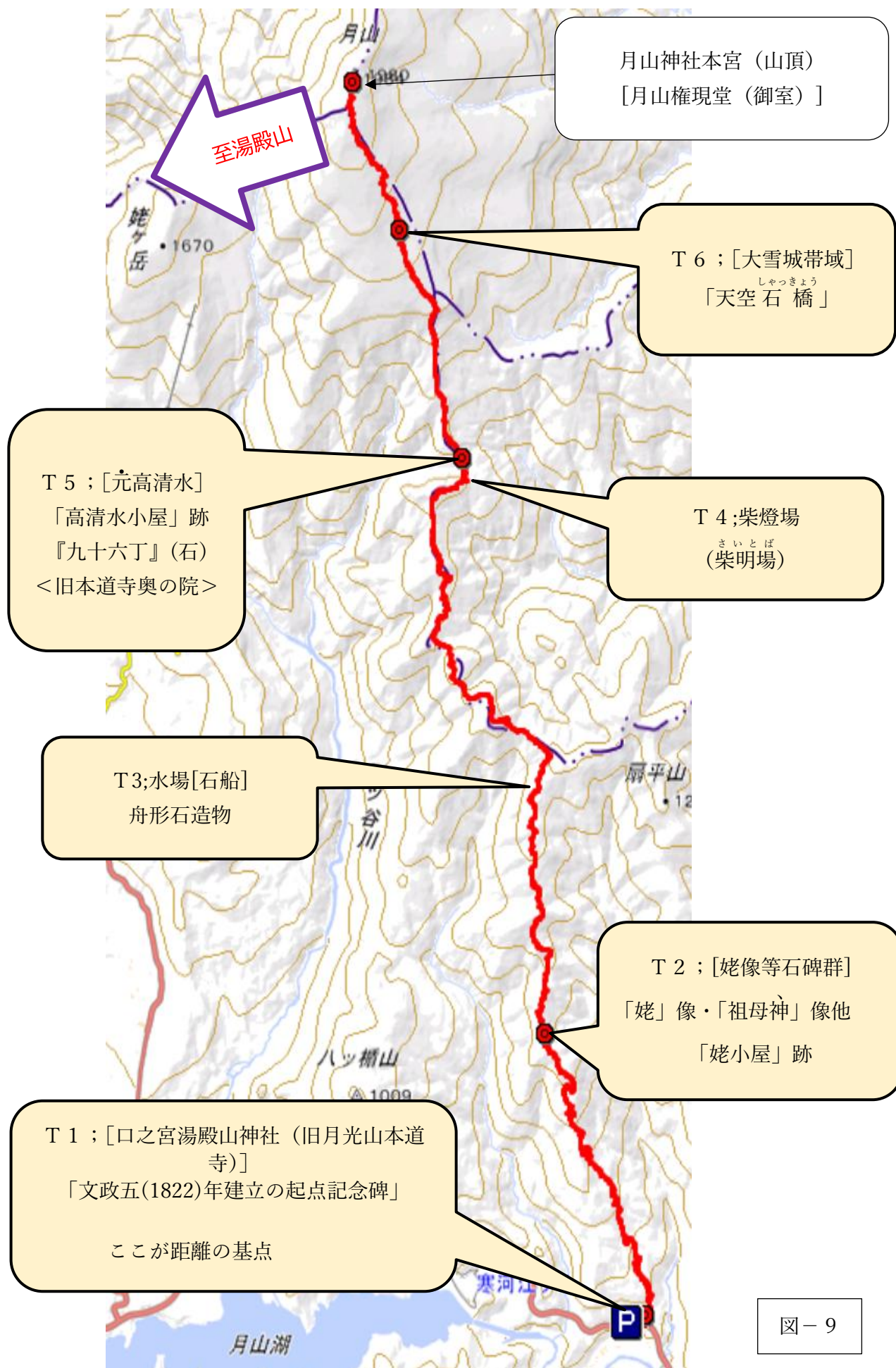
3. 標柱的節目地点の把握～四つのランドマークの力

本通りを纏める時に、図(表)－8・9のと通りの大きな六つ標柱的節目（ランドマーク）を押えることにします。

T 1	旧本道寺は弘法大師こと空海が開基、大日如来をご本尊とする「月光山光明院」から始まった境内の一角に、本通りと歴代住職の墓石群地に行く道と旧六十里越街道脇往還が十文字交差する今にいう「道路元標」打点地は往古より特別の地とされており、後に文政五年基点記念碑を建立した。
T 2	姥像等石碑群と姥小屋跡地のエリアは、三十三丁と三十四丁の間に位置する特別な霊域で、観音浄土と観想されたであろう。男女の性別、身分の上下に分け隔てなく観音菩薩が発揮される応現 みょうちりき 妙智力、すなわち無限調和神通力の――まさに「慈悲の情理」の聖気滞留地と観想し、ここに『中』の意味合いを当てます。慈悲はまさしく無償の愛・無償奉仕と同義であります。古来より同等・同様の感覚だったことでしょう。 ここに「祖母神」像、「南無三十三観世音供養」塔、墓石供養塔3体が奉納された。
T 3	河・海がなく舟・船とは縁もゆかりもないこの山奥の山道の尾根筋の水場に、四角や丸やもちろん三角の形状では無く、「舟形」の石造物が寄進奉納された。なぜなのか？、どんな身分なのか？ 鍛冶職人（鍛冶屋・鍛冶師）か、その親族（代行・代替か）、あるいは、山師（鉦山師か）、あるいは、里先達（修験者・山師兼業）と想像するが、山師（鉦山師）の可能性大とみる。

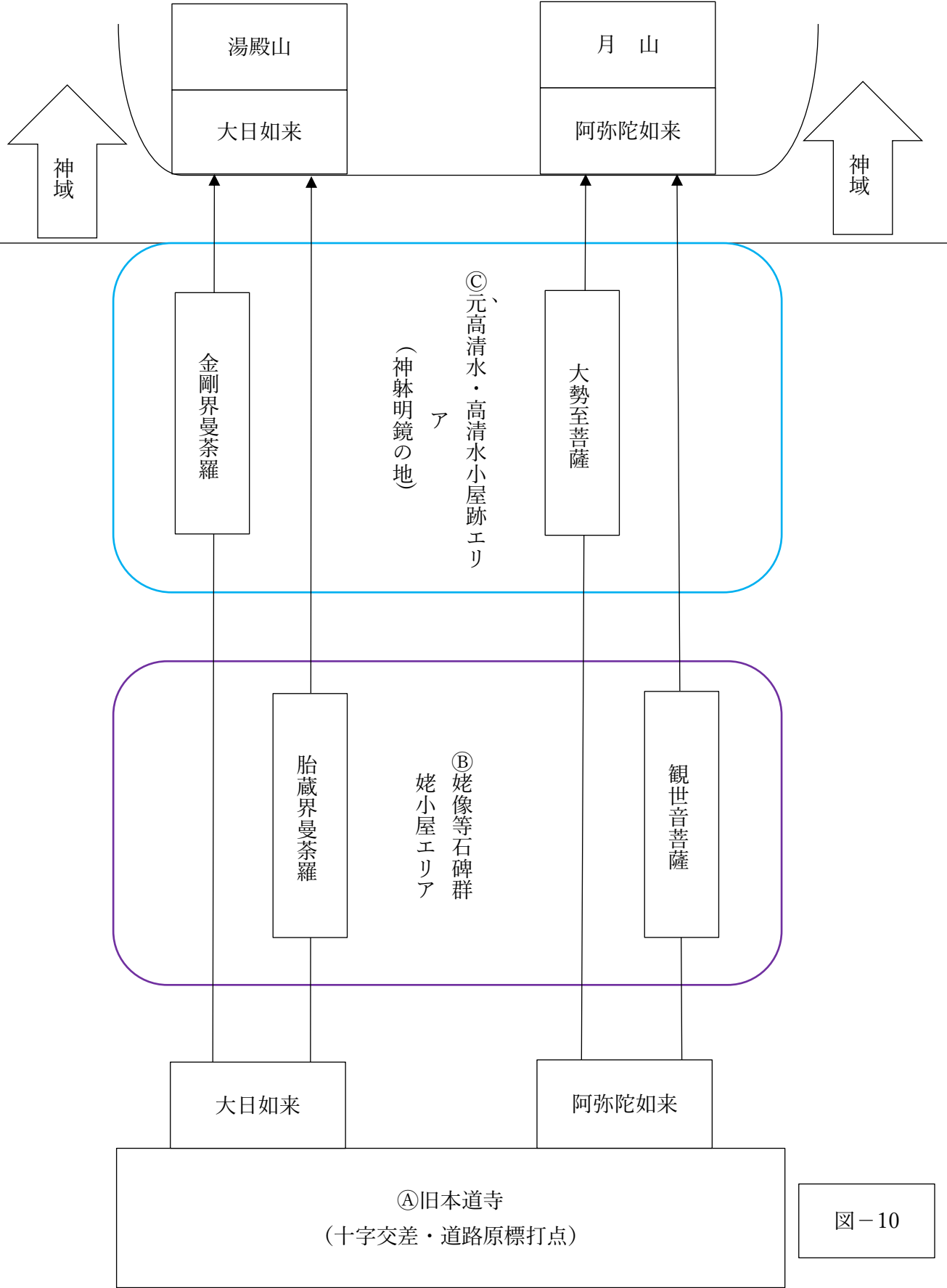
T 4	現在道標の名称は「柴燈場」であるが、古語は「柴明場 ^{さいとば} 」と書いた、小高い丘となっており、真東下に烏川不動滝（自然の岩体そのものが不動尊）が位置している。先祖供養の一つとしてのお柴燈、護摩供養としての柴焚きを行ったのだろう。		
T 5	『元高清水』のエリアは、①往古より『旧跡神躰明鏡』の地と称され、『七宝八功 ^{しちほうはっく} 』の見立てとぴったり一致し、小屋を掛け最終九十六丁（石）を安置した特別な霊域である。また、②本通りに唯一掛けた「高清水小屋」跡は証拠付ける古文書と位置が一致する。③その掛け小屋は開山期間中の道者・行者接待と期間外の山師利活用があったこと。阿弥陀如来のもう一人の担い手勢至菩薩が放たれた無上の光明力——まさに「智慧の合理」の聖気滞留地と観想し、ここに『正』の意味合いを当てます。智慧・合理とは、筋道が通り正義に適うことの譬えでもあります。智慧は創造力発揚と同義であります。古来より同等・同様の感覚だったことでしょう。これらを総合すると当該地は「旧本道寺奥の院」と見做していたのかもしれませんが。		
	「元高清水」まで間に「鹽竈六所明神 ^{しおがま} 」を勧請した金佛（銅像）を1個所当り6体、6個所に計36体を奉納安置した。		本 通 り T 5 ま で 共 通
	「元高清水」まで間に丁石九十六体奉納安置の大事業を証拠付ける文政五年建立の起点記念碑にとおりに丁（石）が点在している。その九十六（四十八の2倍）体は阿弥陀如来の四十八誓願が由緒である。		
T 6	過去に如何なる事情があったにせよ、人工的なものであります。これからは、月山水源聖地のGスポット（great のG）シンボルであり、素晴らしい歴史遺構の出現である。源流信仰等に係る何らかの斎儀の舞台とした可能性は大である。		

図(表)－8



4. 往古よりの五大に亘る「天・地・人」の内観図

図(表)－10・11のとおりです。



神秘と不思議を生む源泉

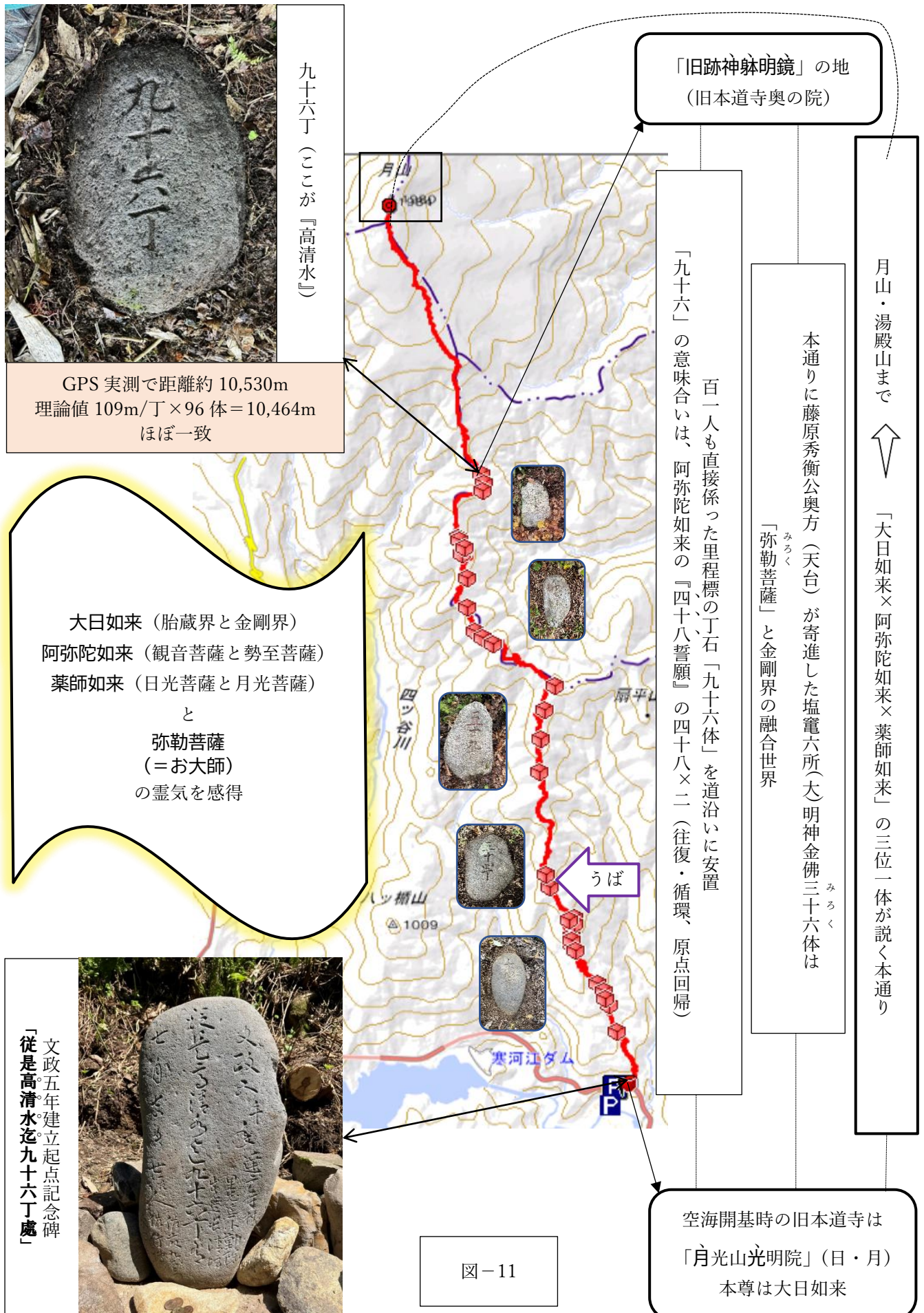


图-11

5. 本通りに登場する神仏の相関

本通りは、本通り基点を為す本寺の主尊大日如来を根本とする精神構造が渦巻く^{やまみち}高清水通りなのであります。本通りは参詣行者だけの専用道ではなく、山師（鉾山師）を係った歴史に鑑みて、彼らが尊崇の神仏世界を取り上げます。

今野竹蔵著「北條郷鉾山史話」（宮内文化史研究会）に記載の北海道北見北 隆鉾山名の「同盟坑夫取立免状」という冊子（**類似・酷似のものは全国各地の山師が携行**）に着目します。この「同盟坑夫取立免状」の原点を辿れば、徳川家康が征夷大將軍になったのは、慶長八（1603）年で、それから30年も前の天正元（1573）年、室町幕府が滅びた年に家康が制定した「山の法度五十三ヶ条」であると言われている。

その冒頭部に「規定」という項目で図-12のとおりの神仏の名前だけを羅列した一覧が記載されています。私はこれに強い関心を抱いた。部屋の^{しつら}設え・飾り付けのために掛軸風に垂らしたもののなか、あるいは、作業所の天井板とか、土留矢板などに墨書したのか。この^{かみ・ほとけ}神仏を格別に崇めよということだろうと推察しました。

しかし、この神仏の説明は一言も何も記述されてお**りません**。そこで大沼が依って立つ意味合いを思慮し、尊格・関係性を読取り、意義付け・分類整理・体系化・概念化を図りました。その結果を図（表）-13~16のとおりに整理しました。八百万の神々と諸仏を代表化したきれいな対

称性・均衡性・調和性が浮び上がります。まさしく、天地人三位一体の融合に基づく所願達成、天下泰平、事物繁栄への道が見えて来ます。日本民族の無意識層に沈殿している感性、美意識が読み取れます。

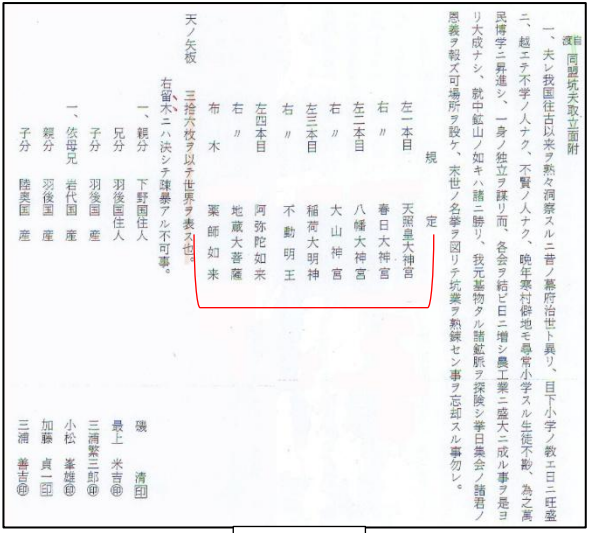


図-12a

山師必携手帳記載の原本 (以下の様に単に羅列)			原本を当隊でグループ化		
			グループ C	グループ B	グループ A
布 右 左 右 左 右 左 右 左 木 四 三 二 一 目 本 本 本 本 目 目 目 目 目 薬師如来 地藏大菩薩 阿弥陀如来 不動明王 稻荷大明神 八幡大神宮 春日大神宮 天照皇大神宮		阿弥陀如来 地藏大菩薩 薬師如来	大山神宮 稻荷大明神 不動明王	天照皇大神宮 春日大神宮 八幡大神宮	
				「三社託宣」	
図(表)－12b		図(表)－13			

- 天照・八幡・春日は元々三社託宣を構成し、その垂迹神は大日・阿弥陀・薬師の本地仏と対応しているが、本件旧本道寺の三尊基本構造と一致していることに気付いたものです。
- 当該本図表のみならず章に記述した図表中の要因・要素は本通りに投網された、本通りを^{いじょう}囲繞した「綾取り網」結び目の粒子であります。
- 地藏菩薩は、釈迦入滅後、弥勒菩薩が如来として現れるまでの無仏の間、衆生を救済するとされる。菩薩でありながら一般に僧形で、右手に^{しゃくじょう}錫杖、左手に宝珠を持つ姿です。錫杖とは、主に真言宗、天台宗の密教寺院の僧や修験道の行者が使う梵音具（鳴物法具）であるということです。特に空海こと弘法大師御の修行姿大師像は必ず持っている姿です。
- また、弥勒菩薩は、現在仏であるゴータマ・ブッダ（仏陀・釈迦牟尼仏）の次にブッダとなることが約束された菩薩（修行者）で、仏陀入滅の「56 億 7 千万年後」にこの世に現われて悟りを開き、多くの人々を救済するとされる未来仏です。さらに、弘法大師はその弥勒菩薩と共にこの世に現れるとされています。

すると、信仰上は、地藏菩薩⇄弥勒菩薩⇄弘法大師（空海）⇄大日如来⇄天照皇大神宮⇄地藏菩薩と円環上に繋がります。

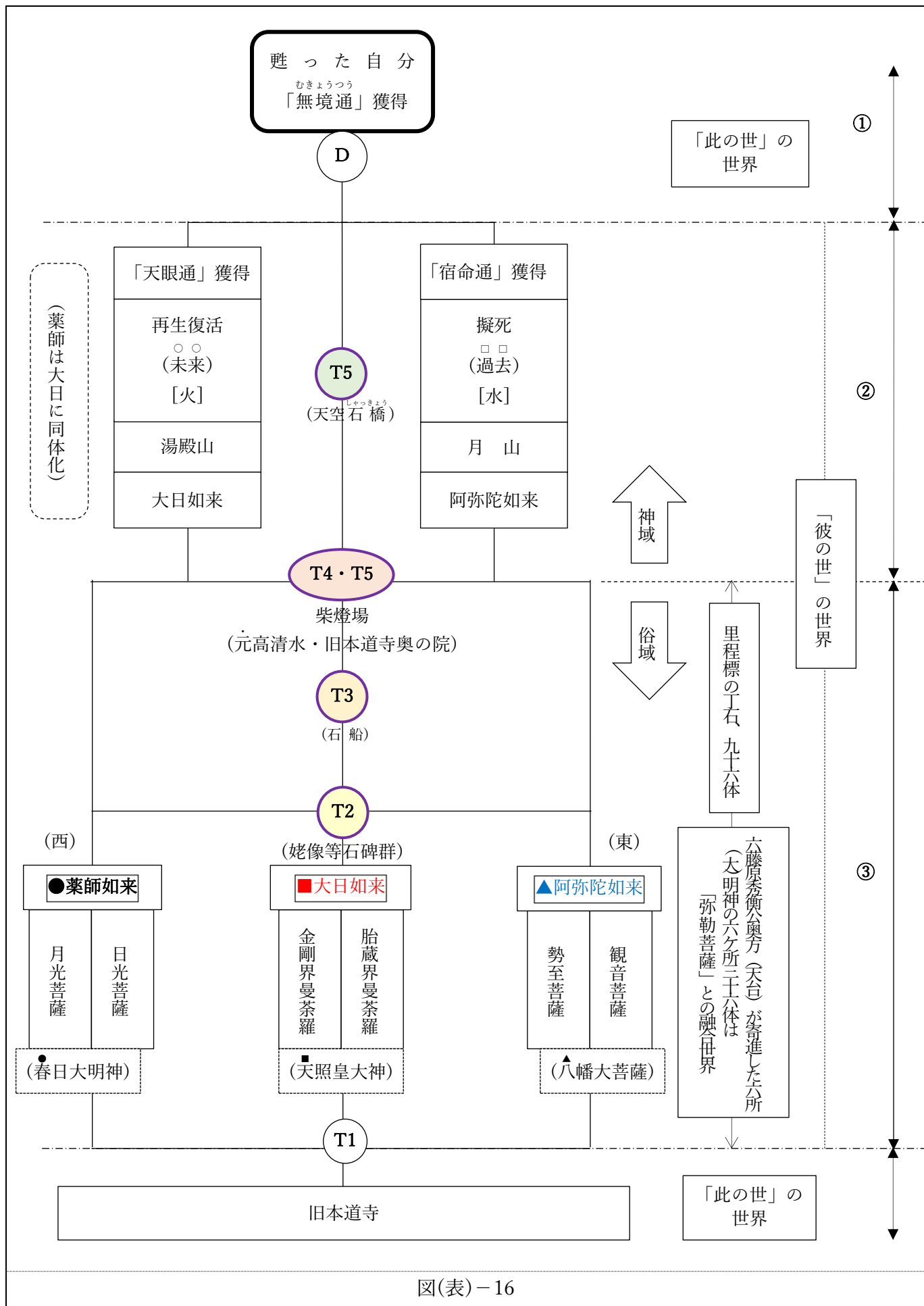
よって、地藏菩薩は修行の果てには大日如来と繋がって行くという観想が起きます。

前記図(表)－13 の尊格・関係性を意義付け								
不動明王 ■大日如来								
↑↓			↑↓		↑↓			
▲ 阿 弥 陀 如 来	大地蔵大菩薩	● 薬師如来	稻荷大明神	大山神宮	春日● 大神宮	天照皇大神宮 ■	八幡大神宮 ▲	
仏の世界 (裏に垂迹神)			里の神	山の神	神の世界 (三社託宣) (裏に本地仏)			
精神世界			生活密着(経済・物的)の世界		精神世界			
図(表)－14								

本地垂迹の関係は代表例			
三社託宣	神宮名	垂迹神	本地仏
	▲ 八幡大神宮	八幡大菩薩	▲ 阿弥陀如来
	■ 天照皇大神宮	天照皇大神	■ 大日如来 (大地蔵大菩薩)
	● 春日大神宮	春日大明神	● 薬師如来
図(表)－15			

6. 潜り抜ける3段階ゾーン

図(表)－16 は、下流帯（下部帯）の三尊三位一体構造・3軸霊気流併存構造からスタートし、中流帯（中間帯）の2軸へ、上流帯（最終帯）の1軸へ昇華する様相を総体して図化してものです。



図(表) - 16

その１；図(表)－17～日常における我々の「陰」への片寄り（偏り）を^{ただ}糺す必要があります。神仏の靈威を勧請・感得し、お祓い、祈祷の除魔の作法も有りだが、何により、心の浄化の強い意志を以って、「陽」力を強めて中和する必要があります。そのために如何に身を以って^{ぎょう}行ずるかについて、自問自答・反芻しております。

二元	心の清濁二極	
陰	よごれ	無意識層―――深い ^{まな} 末那識・ ^{あらや} 阿頼耶識に沈殿した罪・穢れ・ ^{まがごと} 禍事
陽	きれい	自らの意思による修養・精進を以って獲得する清浄・無垢の正・中

図(表)－17

その２；前頁図（表）－16 中の㊸から㊾のポイントには、図(表)－18 のとおりの意味を付与しております。

T 1	(十字交差・本通りの道路原標打点地、文政五年建立起点記念碑地点)		
T 2	姥像等石碑群・ 姥小屋エリア	『中』 の靈氣	ここで格別の精神的集中を以って『中』の神髓を修養
T 3	舟形石造物「石船」		「火と水」を始原として神 ^{かみ} (火水)が誕生
T 4	柴燈場 ^{さいとば} (柴明場)		護摩焚きと四方祭
T 5	元高清水・高清水小屋跡エリア (神鉢明鏡の地、旧本道寺奥の院)	『正』 の靈氣	ここで格別の精神的集中を以って『正』の神髓を修養
	(T 1 に戻って原点回帰)		

図(表)－18

その３；図(表)－19～人間はみな建前と本音で鬩ぎ合って藻掻いています。自らの内に自らが寝た子を起こす様に掘り起こしている「執着・煩惱」に振り回されている日常ですが、その両面を精神性世界と物質性（経済性）世界に単純２分化して表して見ます。この両者はある面では対立的な側面を持つものです。高清水通りはこの相待する両者・両面が交錯した古道なのであります。その中で、いかにして調和・秩序あるものにするか、地元・関係者は腐心したことでしょう。

	行者目線	山師目線
精神性世界 (見えない)	加護・恩寵を期待した神仏への帰依・敬神崇仏 「中・正」を燃料とした精神活動	
物質性世界 (見える)	宿泊料 参詣料・賽銭・初穂料 案内料 (対価・実利)	鉱山開発による金銭的利益獲得 雇用労働市場提供 (経済・利得)
図(表)－19		

その3；各ゾーンの意味合い

✓図(表)－16③・3軸ゾーン

T2～ここは人のへそに当たります。それぞれが、本道寺より大日如来(即ち、阿弥陀如来と薬師如来と弥勒菩薩)と同業二人で出立し、約3.8km先の姥像等石碑群の所まで上りが続き、身体が慣れない中で必死に登る時間帯、助走・序章区間であるものの高揚感色褪せずこの地に到着します。神仏と一体にならんとする心の清浄の誓願――精神浄化の気概が充満している中で、慈悲(情理)を授かる観音菩薩・胎蔵界曼荼羅との対話・交渉を楽しみ小休止となります。ここはまさしく慈悲・情理の心を洗練する特別の空間・時間帯であり、真に相応しい「中」を当てます。

その先歩みを進める中、格別に傾斜がきつい所はないが、昇降を繰返しながら標高を上げて行く道すがら現実の厳しさや生老病死の苦渋感が交錯して来ます。そしてあれやこれやの思慮が整理つかないまま元高清水(姥小屋跡地)エリアの所に到着します。

T5～人の心肺機能に当たります。本通りの中核点、最高の秘所・聖地と見做した旧本道寺奥の院であります。智慧(合理)を授かる勢至菩薩・金剛界曼荼羅との対話・交渉を楽しみ小休止となります。ここはまさしく智慧・合理の心を洗練する特別の空間・時間帯であり、真に相応しい「正」を当てます。ここで俗域とはお別れです。

✓図(表)－16②・2軸ゾーン

いよいよ元高清水を離れ神域突入です、心の修養の最後の仕上げの段階に入ります。阿弥陀気流は過[□]去[□]を省みる力「宿命通」^{しゆくめいつう}を、大日気流は未来を洞察する力「天眼通」^{てんげんつう}を養生します。各気流が対比相対(待)関係にある慈悲と智慧を帯びた、阿弥陀浄土(月)の霊気と金胎曼荼羅浄土(日)の霊気が渦巻き鎖交している本通りであります。人によって阿弥陀、大日のどちらに傾倒しても、それらの神通力が本通り参詣者を包んだのです、参詣者はそれを意識したのです。

なお、薬師如来は退出し黒子の役目を担って貰うこととします。同如来は真言密教(東密)では、『覚禅抄』^{かくぜんしょう}を由来経典とし、曼荼羅に登場せず大日如来に同体と見做しているからです。もう一つは、同如来は健康護持に対する応現性という極めて現世利益の強い尊体であることから、神域の中では黒子的存在が適切であると見做します。

✓図(表)－16①・1軸ゾーン

本通りに分け入り月山・湯殿山参詣を終えた——満願・結願した道者・行者は生まれ返った、甦ったのです。現実には煩惱滅却・悟るということは不可能でしょうから、せめても、喜怒哀楽の制御・調節くらいの意識は目芽生えたことは実感するでしょう。心身の浄化・新陳代謝を実感したことでしょう。スタート時の3軸から2軸へ、最後に1軸で仕上げとしたのは、意味があって、必ずや心の雑事・雑念を整理した一念集中の癖取りを獲得するだろうということです。「宿命通」「天眼通」を併せ持って、結果、現世における「無境通」^{むきようつう}を獲得することになりましょう。「無境通」^{むきようつう}とは、左極と右極の相對(待)二元をあえて二重同時保持を意識し、その片方の極に捉われることなく、自由自在に往来・往復する、円転滑脱に何ら支障のない境地となることを指します。生きていれば瞬時瞬間が判断の分岐点に立つも同然です、その中で人間力を総動員して最適な道を選択する力を意々ます。無意識層が判断した瞬時の力、瞬発力です。

言い換えると、その判断分岐点はみな二律背反です、その蒙昧の中で瞬時に最良を判断する力ですが、実は、これは、短期間の修行中に生まれるものではなく、日常・日頃の何事においても正・中の意識と、かつ、そのタガを外した、枠組みを外した対応の中で無意識層・深層心理に畳み込まれた中で培われるものです。

7. 登場仏の聖性視覚

その1；四諸仏①大日如来・②阿弥陀如来・③薬師如来と、④弥勒菩薩について、信仰面から見た視覚的特性イメージ——神仏の応現力に対する人間側の期待感の方向性は図(表)－20のとおりになる。

俗域・娑婆とは人間の住まうこの世・娑婆世界を指し、聖域・聖地とは人間対応では悟りの世界、神仏の住まうとされる霊地・あの世を指す。

同図(表)(A)の動的特性を統合すると同(B)弥勒菩薩の特性——※1 上向き⇒水平⇒※2 下向きに変化し、逆に弥勒菩薩の特性を分解すると同(A)の個性に戻る。

※1；弥勒上生信仰とは、死後に弥勒の傍に昇り、あるいは、生きている中においても弥勒のいる兜率天に昇ることを願い、長い間弥勒と共に暮らしながら教えを請い、弥勒と共に再び現界(此の世)に降りて来る信仰をいう。いわば「↑(上向き)と―(水平)と↓(下向き)」の合成イメージとなる。

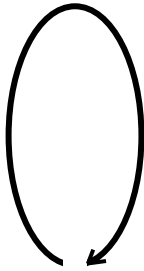
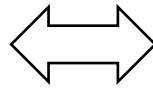
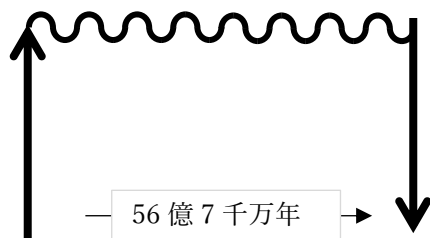
※2；弥勒下生信仰とは、兜率天の弥勒がこの世に降りて来て説法する機会に巡り合うことをひたすら待ち望む信仰をいう。

なお、この解釈は様々である。

※3；弥勒信仰の初期は下生信仰が先行し、上生信仰は阿弥陀信仰(死者の極楽浄土行きを願う)の影響を受けて後で生まれたとされるが、今は、死後の弥勒浄土への上生を願い、いつかは、生れ変ってこの世に生き返りたいとする下生信仰の順になっているとされている。

その2；大日如来は円弧(半円)——ブーメランの動きをし、弥勒は阿弥陀如来・薬師如来の上下直線的な動きと、弥勒本来の左右水平波直線合体の動きに見えて来る。弥勒の世界からは、希望、大器晩成、継続は力なり、が浮かぶ。これらから学ぶこと大なるものがある。「相違そのまま是認 対等互啓(恵)」の「心(認識や精神)・言(言葉や言語)・行(行動や活動)」である、こうなれば、自ずと調和の真理が出現するのだ。

これらの中にも、『九十六』＝『四十八』×『二』における、調和思想を象徴する「行って(一)来い(一)」の往復・循環の「二」を含んでいる。

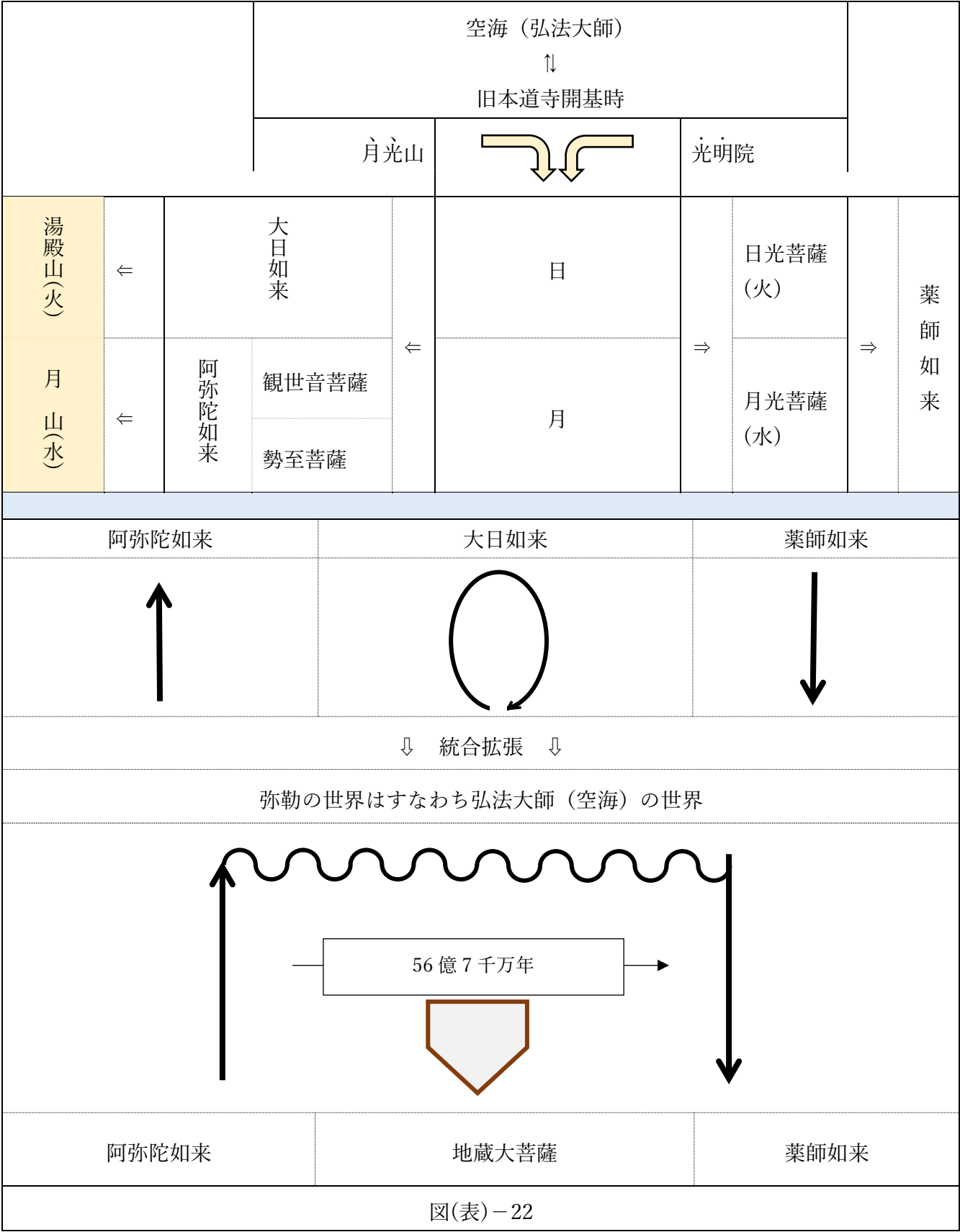
(A)					(B)
聖域・聖地  俗域・娑婆					
(対応仏)	阿弥陀如来	薬師如来	大日如来	[統合] ⇒	弥勒菩薩
(三世)	未来仏	現世仏 (現世利益)	現世仏 (現世利益)	——	未来仏
(物化 イメージ)	吹き矢 (打ちっ放し)	引出し (引き寄せ)	ブーメラン (放物線)	⇐ [分解]	ドローン (垂直離着陸・水平飛行)
図(表)－20					

その3；次に行く前に出羽三山と本地垂迹説による神仏の関係について、いでは文化記念館発行「羽黒山の神仏分離」を参考に図(表)－21のとおり整理しておく。本通り側から見れば、同表中の中・下段が強く係って来る。

山名			社名	祭神（垂迹）	本地仏
－	羽黒山		いでは 出羽神	いでは 伊氏波神・稲倉魂命 (羽黒権現)	(聖)観世音菩薩
水	月	月山	月山神	月読命 (月山権現)	阿弥陀如来
火	日	湯殿山	湯殿山神社	大山神 おおあなむちのみこと すくなひこなのみこと 大己貴命・少彦名命 (湯殿山権現)	大日如来
図(表)－21					

その4；さて、地蔵菩薩は、仏教始祖の仏陀が入滅された後の56億7000万年後に兜率天から弥勒菩薩とそつてんが救世の仏としてこの世に降臨・出現されるまでの間、仏陀に代わって衆生を地獄の苦しみから救済・教導の役割を担うこととなっている。いわば、仏陀の死と弥勒降臨との間の無仏世界の救世主となる。

それらの意図を発展的に図(表)－22に概念化展開します。



8. 平面的十字交差集約

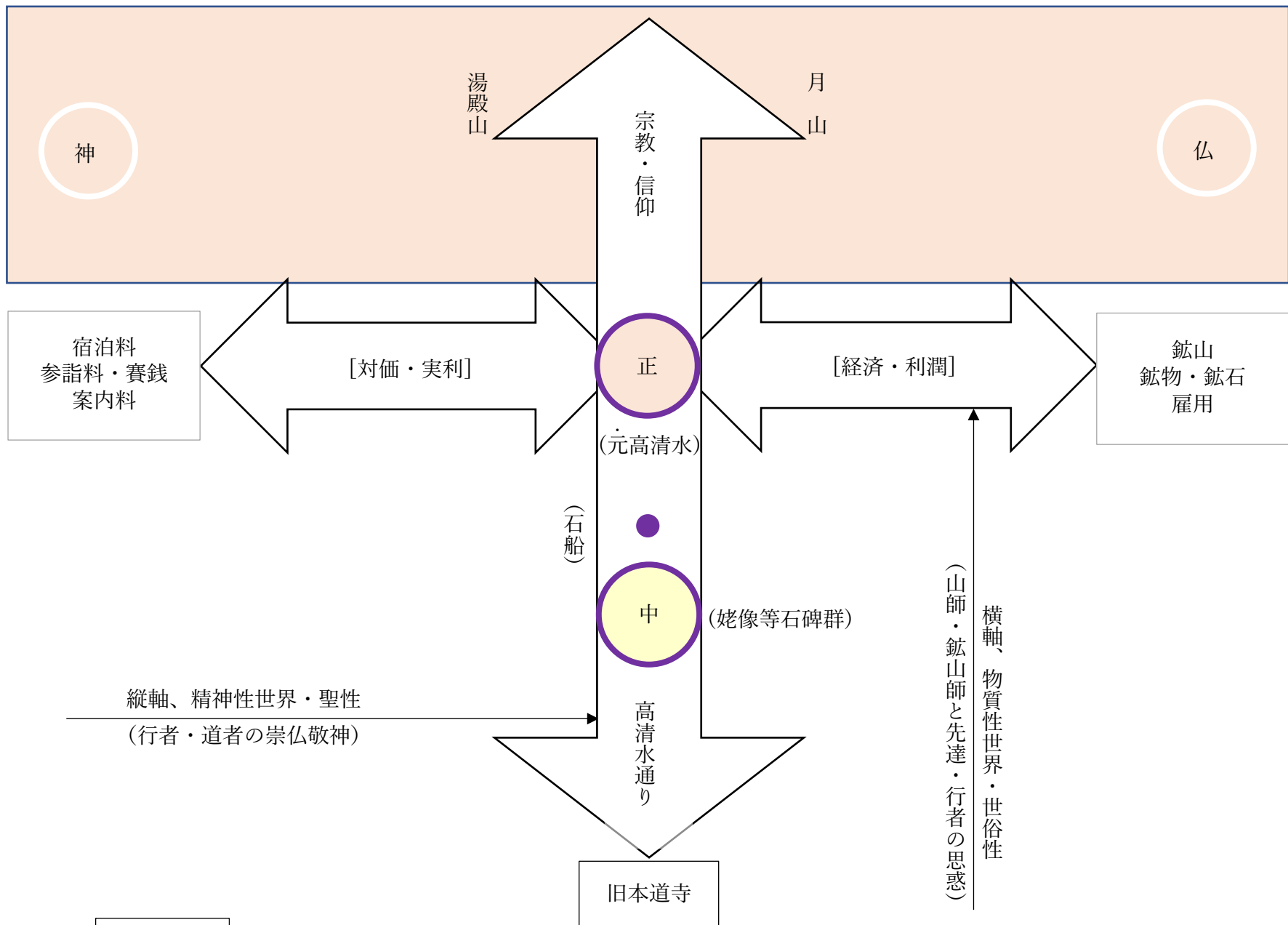
以上を集約化し、物質世界と精神世界に二元的対称性を持たせて、概念図化を図(表)－23・24のとおりに描きます。

この宇宙の森羅万象、万物について、人間の分別知・認識を以って分けると、大きくは二つ、掴むことが出来る物質世界と掴むことが出来ない精神世界に整理されるという観方に対応します。大沼の私見で関連付けています。五大は物質世界と精神世界の両面を内蔵・内包したものの象徴なのであります。「不思議が五大に宿る」高清水通りであり、「五大に宿る不思議」アーカイブ解凍大作戦でありました。

図(表)－23									
----		—	木	火	土 (地)	金	水	風 (月・陰)	空 (日・陽)
自然哲学		五気	○	○	○	○	○		
(連関)			Ⓐ	↓		Ⓑ	↓		
密 教		三大	▲		○	▲			
		五大		○	○		○		
			地中———鉱石・鉱脈の生成（構成）要素					—	—
			物的世界					動	静
								精神世界	
地	変化に対する抵抗性、安定性、万物を受止める抱擁性・・				物体として掴むことが出来るもの		物的性世界		
水	有形無形の流動性、柔軟性、清浄性・・								
火	万物滅却の強大性、情熱、欲求、活動性・・								
風	成長、拡大、自由性（自由自在、縦横無尽）・・				心で感じるもの（掴むことが出来ない）		精神性世界の『動』		
空	時空超越の本質性、真理・・						精神性世界の『静』		

「不思議が五大に宿る」「五大に宿る不思議」

「不思議が五大に宿る」「五大に宿る不思議」



高清水通りは「不思議と五大」が塔立・融合の須弥山ワールド
しゅみせん

図-24

大きくは横軸に重ねた物質世界と、縦軸に重ねた精神世界の十字交差形成を想起します。全体的・抽象的には、横軸は始まりと終わりを、縦軸は天と地の結合を、つまり、対極にあるものの統合を意図します。本通りに当て嵌めれば、信仰・宗教の御山に傾注する人達と、鉦山の御山に注力する人達との相利共生・相互扶助を以って繁栄して来たことを象徴します。

また、図（表）－25 にも関連付けます。

娑婆・此の世	分別知	現実(本音)	物質世界	十字交差	
			精神世界		
	無分別智	理想(建前)	無境界	メビウスの帯	
↑（等価返還）↓					
娑婆 此の世	正(分別知)	合理	智慧	大勢至菩薩	元清水
	中(無分別智)	情理	慈悲	観世音菩薩	姥像等石碑群
図(表)－25					

高清水通り

月山・湯殿山を目指した本通りにおいては、娑婆の世界から新たなステージ神仏^{かみほとけ}の世界へ誘う『中・正』^{ちゅう せい}の基点を潜ることになります。こうして、天地人——天（神仏）・地（自然）・人（心身）の三位一体感を探り、満足感を得ようとする人間が往来した古道であり、これらの靈氣に揉まれながら心の迷路を抜け出し清々しさを味わったのです。別称「中・正 高清水道^{ちゅう せい どう}」であります。

すなわち、本音と建前の狭間でうごめく生身でありながらも道者・行者となつて、ままならぬ喜怒哀楽、諸行無常の儚さに右往左往する自己を見詰めつつ、大きな夢・希望を並べ、立派な人間にならんと秘かに誓い、心眼修養を志す諸人を受け止めてきた本通りであります。

以って、高清水通りは、何かにと現実（本音）と理想（建前）の葛藤・悲喜交々を抱えながらも至高・崇高な神仏の教えにすがり——いくら立派という評判でも生身の人間はさすがに対象にはなりえません。——朝鍛夕鍊の錠^{ちやうたんせきれん}（情^{じやう}）を以って共に切磋琢磨を図ってきた本通りであります。そして、成熟した人間へと脱皮し、完成形へ一歩前進・昇華した充実感を抱き帰路に着いたことでしょう。

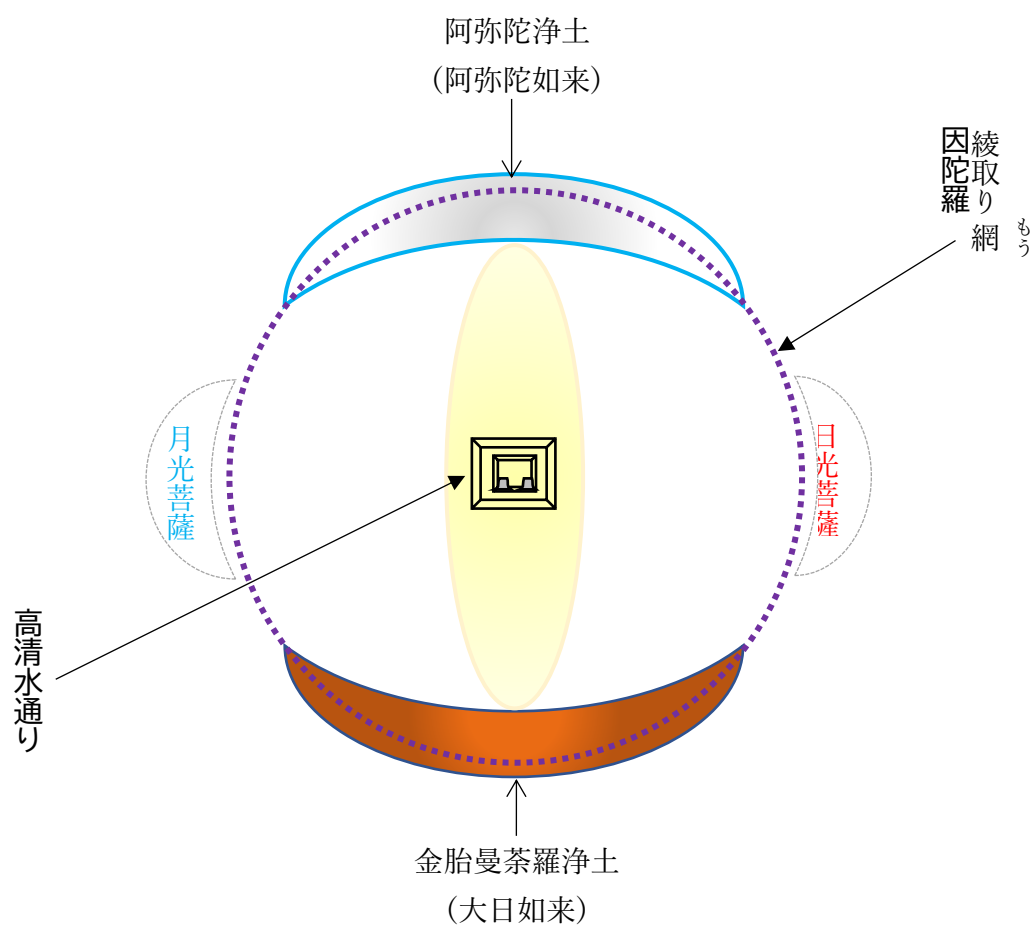
9. 立体的集約

さらに立体的・三次元的に概念図化すると図－26 のとおりです。本通りに分け入る人は、五大（地・水・火・風・空）に融解している——下層には曼荼羅浄土の靈氣が、上層には阿弥陀浄土の靈氣が、左右に薬師浄土の靈氣が漂う、それらの粒子を結び目とする^{いん だ ら も う}（注）因陀羅網——投網・圍繞された綾取り網

空間内のトンネルを潜るというイメージになります。人智を越えた靈氣充滿を無意識・無自覚のうちに感受する特別な空間です。少し違ひだろうが、今様の言葉で言うと「心のサプライチェーン」が直感しました。同網の結び目を造っている宝石・珠玉は物理的な『物』ではありません、神^{かみ}仏^{ほとけ}が授ける「人が生きる道の教え・訓え」であり、行き交う人々の「無類の命・魂」の譬えであります。綾取りを印象付ける両手は、表の自分と裏の自分、私と貴方を譬えます。

(注) 因陀羅網^{いんだらもう}とは、帝釈天（仏教の守護神）の宮殿を飾る網のことで、重々無尽、無限連鎖の世界を意々ます。その無数の結び目一つ一つに宝石・珠玉があり、互いに映じあうことから、一切のものが互いに障害とならずに関連し合うことに譬えます。

修験道においては、普通でない自然造形物、つまり、左右上下対象でない奇形象の物、あるいは、他とは違う靈魂漂う所に出会うとそれらを神聖視し、都度に拝礼し感応道交を図るのは常ですから、本通りにおいても節目で篤い祈りを奉げながら月山・湯殿山を目指したことでしょう！



われ
吾行かん幸の香沁みる高清水通りに
神と仏が綾取りむすぶ

図-26

10. 大日如来（像）の腹蔵に阿弥陀如来（像）

昭和以降の地元の人達の旧本道寺（寺）を中心とした信仰に係る認識は「旧本道寺（寺）＝湯殿山（大日如来）」、つまり、旧本道寺（寺）の門前町本道寺宿坊街に泊った行者のほぼ 100%は湯殿山のみを目指した（**オンリーワン湯殿山、湯殿山オンリーワン**）という見方ではなかったのか。

しかし、私が 2022(R4)年高清水通りに入った時の素人直感「旧本道寺（寺）＝湯殿山（大日如来）≡月山（阿弥陀如来）」、つまり、旧本道寺（寺）の門前町本道寺宿坊街に泊った行者は、湯殿山詣出だけではない(Non)！ 月山をも参詣の重要な対象にしたという考えを持ち、西川町史等の史料・資料を踏まえて、調査報告書に記述して来た。学識者は見ていないだろうが、おそらく、世の学識者は、取るに足らないと一蹴するだろう。“高清水通り、そして、旧本道寺を語る時、なぜに、薬師如来や阿弥陀如来を絡ませるのだ？”という疑義を持った方がほとんどではなかったか、私の見解に疑念を持った者が多数いただろう。

ところがどっこい、というか、青天の霹靂！ **旧本道寺に安置されていた大日如来（像）はその腹蔵に阿弥陀如来（像）を抱いていたということが判明したのである。**私の考え方を補強するエビデンスの出現である。まずは、テレビ放映から、図-27 は T U Y 放送画像から切り抜いたものである。



図-27

江戸時代後期に、西川町旧本道寺（現口之宮湯殿山神社）にあったが、1796(寛政8)年、米沢市関根の「普門院」に贈られたとされる「木造大日如来坐像」の修復過程において、X線撮影中、胴体内部に「阿弥陀如来立像」が入っているのを確認したということから、それを3Dプリンターで複製し、先日 2025(令和7)年9月8日（月）、里帰りの意味合いを込めて同神社贈られたという。

次に、同様の物に関する図-28 のとおりの山形新聞報道を取上げる。

これは、まさに「大日如来＝阿弥陀如来」を意味する、密教ではそのとおりの見立てであり、当然のことと言えば当然なのである。

ここに、私の直感が正しいということが証明されたのである。妄信、大げさと馬鹿にされようもならば、勝海舟が福沢諭吉に放った「行蔵は我

に存す、毀誉は他人の主張」（自分の事は自分が決める。褒めるのもけなすのも他人の意見である。俺の知ったこっちゃねえ）が浮かぶ。

さて、空海こと弘法大師は、大同4（西暦809）丑年4月8日湯殿山を開基し、引き続き同年8月8日に山号寺号を「月光山光明院」と名付けて本道寺を開基した。その後の天長3（西暦827）年に湯殿山大権現を勧請して「月光山本道寺」と改号したが、山号は『月光山』で共通的で変わらない。明治7年（1874）年7月10日、奥の院湯殿山が国幣社に祀替えになるに及んで本道寺も還俗し、口之宮湯殿山神社と改称し現在に至っている。言わずもがな空海（弘法大師）開祖の真言宗においての本尊は大日如来であるが故に、空海（弘法大師）⇒（神格化）⇒大日如来、大日如来⇒（擬人化・人格化）⇒空海（弘法大師）と見なされている。その上で、密教では阿弥陀如来はすなわち大日如来「大日如来＝阿弥陀如来」と位置付けられているのである。

普門院(米沢)から湯殿山神社(西川)へ



再現した仏像を最上大元宮司に手渡す
高橋隆文住職(左)
＝西川町・口之宮湯殿山神社

坐像の高さ98・5センチで、約350～400年前の江戸時代の作とみられる。昨年、さびを除去し、欠損部分を修復した。その際、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター(山形市)がエックス線CT撮影装置で内部を調査したところ、阿弥陀如来と推定される高さ13センチの仏像や、巻物や刀装具があると分かった。坐像はもとより、普門院と同じ真言宗の湯殿山本道寺が保管していた。湯殿山本道寺は明治時代の廃仏毀釈により現在の同神社となった。普門院が譲り受けた理由は「はつきりと分かっていないが、高橋住職(69)が「内部の仏像を取り出すことはできないが、形として再現した」と思っている」ということだ。(森谷亮)

米沢市の国指定史跡・普門院(高橋隆文住職)は、同院の本尊・木造大日如来坐像の内部から見つかった「小さな仏像」を複製し、西川町の口之宮湯殿山神社(最上大元宮司)へ寄贈した。坐像は1796(寛政8)年、当時は寺だった同神社から伝わったとされる。坐像の一部が約230年の時を経て里帰りを果たした。

「小さな仏像」里帰り

本尊内部の阿弥陀如来複製

230年ぶり

図-28

さらに、私の認識を補強する資料を取り上げる。一つ目は図-29である。

「よろずの神」に優劣はあろうか、優劣はないからこそ、みな「塔となり」、つまり、並立である。ということ、元々、大日如来(湯殿山)と阿弥陀如来(月山)に優劣はあろうはずはないという意味合いを含んでいるのだ。繰り返すが、密教においては「大日如来」阿弥陀如来(阿弥陀如来「大日如来」)である、つまり、一体なのである。

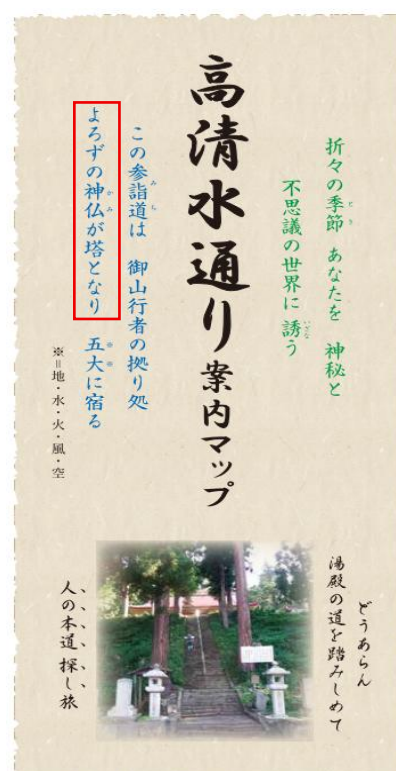


図-29

二つ目は図-30である。

湯殿山、湯殿山としつこく優先付けをしたいのならば、下図の追分碑に習い、御山を入れ替え「**湯殿山 月山 参詣道 本道寺口**」とすればよかっただろうに（なぜしなかったの？）。



左記道標の刻字は右のとおり。

どうあらん 湯殿の道を踏みしめて 人の本道探し旅

月山 湯殿山 参詣道 本道寺口

高清水通り 月山山頂を経て湯殿山に至る 令和二年秋建立



ふくしま

小□□町

弥作

右 月山 羽黒山

道

左 湯殿山 牛首

山先達

福□

長慶坊

地理的位置からすれば、「左 牛首 湯殿山」であるが、目的地の湯殿山をクローズアップさせたということだろう。

図-30

第15章に記載した旧本道寺（真言宗）門前の元宿坊「一明坊」に伝わる（所蔵の）門外不出の「南無阿弥陀仏」掛軸を図一31に再掲する。阿弥陀仏はすなわち阿弥陀如来に帰依するという意味であり、大日如来を本尊とする真言宗開祖の弘法大師（空海）が彫刻したものと記述されている。

すると、大日如来（像）が阿弥陀如来（像）を腹蔵していたということは、当り前の当然のことと言えはそれとおりである。繰り返すが、密教においては同二つの如来は一体とされていることから何の不思議なことではない。

旧本道寺に安置されていた大日如来（像）はその腹蔵に阿弥陀如来（像）を抱いていたということは、私にとってはこの上もなく感慨深く嬉しいことである。21世紀の長い時空の中での一時期の隆盛を以って、有史以来が湯殿山オンリーと決め付けて誇るのは浅慮浅薄の何ものでもないとレッテル貼りされるのが落ちである。

私は弘法大師（空海）直筆の書本を見ているが、“大日如来だけを拝め、他は排斥せよ、他は邪教だ”などと思いがったことは一言も言っていない。左記掛け軸にしても、三世十方諸仏を登場させているのである。

つまり、旧日月寺、ならびに、同寺帰依の庶民は、有史以来、湯殿山と月山を並立的に崇敬して来たのである。これに屁理屈を着けて軽重を計った処で空論に過ぎない。



図一31